大將

柴田東三郎

講談社

大　将

昭和四十五年一月二十日第一刷発行
昭和四十六年一月十二日第五刷発行

著　者　柴田錬三郎

発行者　野間省一

発行所　株式会社　講談社
東京都文京区音羽二-一二-二一
郵便番号　一一二
電話　東京(945)一一一一(大代表)
振替　東京三九三〇

印刷所　豊国印刷株式会社

製本所　藤沢製本株式会社

定　価　四八〇円

落丁本・乱丁本はお取り替えいたします。

© 柴田錬三郎　昭和四十五年

Printed in Japan

0093-148180-2253 (0)　(文2)

大将　目次

序章　七
異常婚礼　元
鬼　五五
出発　八〇
もうける　一〇六
ぜいたくという事　一三

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

金を落す　一五八
閑話休題　一八一
造船所再建　二〇四
湯　二二六
パイプ敷設　二四九
終章　二七二

装幀　栃折久美子

大将

序　章

一

おそろしく無恰好な男であった。

首が大きすぎた。なんとも、大きすぎた。尤(もっと)も、極端な栄養失調にかかっているらしく、軀幹が骨と皮のために、よけい、首が大きく感じられるのであったろう。首の中でも、耳朶(じだ)と鼻が巨大であった。耳朶と鼻は、栄養失調にかからぬものらしかった。

古来、大耳というのは、出世する運の象徴といわれて居り、後漢、蜀帝までのしあがった劉備玄徳以来、巨きな耳の所有者は、文句なく尊敬されて来た。

しかし、目下のところ、この男は、どう眺めても、出世しそうな容姿ではなかった。

耳朶と鼻の巨大さにくらべて、目がひどく小さかった。これぐらいバランスのとれていない風貌は、珍しい。

尤も、これが、目玉がギョロリとしていたら、ひどく人相がわるくなる。
目が極端に小さいのが、象を連想させる。象の顔は、たしかに、他の猛獣とちがって、愛敬がある。
象を連想させる顔は、絶対に人に不快感を与えない。
まことに無恰好な男だが、どことなく愛敬があるのは、あきらかに、目が極端に小さくて、鼻が巨大なダンゴであるためである。
もともと、こういう風貌は、痩せこけていては、釣合がとれないものである。
天性肥るようにできている身体に相違ない。
栄養失調にかからぬ前は、角力でいうアンコ型の肥満体であったに相違ない。
それが、証拠に、つぎのあたったボロボロの兵隊服の、破れた袖からのぞいた手と、巻脚絆の下の軍靴は、特大であった。
上背はあまりなかった。
荷物といえば、足元に、これもボロの風呂敷で包んだもの、たったひとつであった。
年齢は、無精髭のためにはっきりしないが、三十代であることはまちがいなさそうであった。
時は、昭和二十三年秋——。
原子爆弾の落ちた広島は、まだ、荒野であった。
男が立っているのは、宇品の浜辺の砂地の上であった。ところどころに、焼けた鉄材が、原始時代の恐竜の骨みたいに、砂からのぞいているばかりで、荒涼たる景色であった。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

男の眼眸は、海へ向けられていた。
何を考えているのか、まばたきもせず、じっと、美しく凪いだ青い海原を瞶めていた。
うしろに、跫音が近づいて来た。
男は、気づかぬ様子で、海を瞶めつづけている。
「失礼ですが……」
声をかけられて、男は、われにかえると、頭をまわした。
寄って来たのは、一瞥して書斎人とわかる眉目の整った長身の人物であった。紬を着流しているが、よく似合っていた。
兵隊服の男とは、まことに対蹠的であった。
「貴方は、先刻、駅前の闇市場で、靴みがきの少年に、財布ごとお金をおやりになりましたね！」
「はあ、やりました。しかし、財布の中には、千円しか入って居らんかったです」
千円はまだ大金のうちに入る時代であった。
「あの子は、原爆で、両親を失い、生き残って、原爆症で寝ている姉と妹を、養っている、と云ったでしょう？」
「云いました」
「あれは、まっ赤な嘘なのです。私も、一度ひっかかりました」
そうきかされても、男は、いささかも、動じなかった。
ただ、小さな目を、ちょっとまばたかせただけで、

「そうですか」
と、うなずいたばかりであった。
「腹が立ちませんか？」
学者タイプの着流しの男は、訊ねた。
「あれがまっ赤な嘘なら、まことに真に迫っていましたな。わしに千円くれさせるだけの名子役じゃった。えらいものですなあ」
かえって、男は、感服してみせた。
対手は、いささかあきれ顔で、男を見まもった。
「貴方のような人が、まだ、日本にいたのですねえ」
着流しの人物は、心からそう云った。
「私は、深津三郎という者で、大学で国文学を教えたり、小説を書いたりしているのですが……。戦後の日本の風潮には、殆ど絶望的になっていたのですが、貴方に会って、すこし希望を抱きました」
「わしは、野呂内大太郎という者です。いま、シベリアから、戻って来たばかりで、さっぱり、西も東も、わからんようになってしもうとります」
「この広島が故郷ですか？」
「いや、故郷は、松山です。シベリアで、この広島市出身の戦友が、死にまして、その遺骨を持って、たずねて来たんですが……、こりゃ、もうなんとも、むかしの家は、一軒も残って居りませんな。遺骨をどうしたら、ええものか、と考えて居ったところです」

二

深津三郎は、その時、はじめて、野呂内大太郎の兵隊服の片方に、陸軍大将の徽章がつけられているのに、気がついた。

「貴方は、まさか、大将であったわけではないでしょう？」

「いや、わしは、陸軍軍曹です。……ああ、この徽章ですか。これは、復員船で、一人の老人と一緒になりましてな。もうすっかり疲れはてて居られて、立居も満足にでけんようになって居られるので、わしが、世話をしてあげたのです。将校服をつけて居られるので、たぶん将官じゃろう、と思って居りましたが、将官も兵隊もなくなったので、きかずにおいたのです。……舞鶴に着く前の晩、その老人が、世話してもろうたお礼をしたいが、何も持って居らんので、せめてこれを受けとってくれ、と云われて、この大将の徽章を渡されました。老人は、大将だったのですな。世が世なら、軍曹などは口もきけぬ雲の上の偉い人だったのですな。……老人は、夜明けに、海へとび込んでしまわれました」

「……」

「それで、せめて、わしが、老人の代りになって、この大将の徽章をつけているんですがな」

深津三郎は、いよいよ、この野呂内大太郎という男に、興味をおぼえた。

「どうですか。よかったら、私の家へ寄りませんか。白い御飯ぐらいは、ごちそうできますよ」

深津三郎は、さそった。

野呂内大太郎は、礼をのべてから、
「ちょっと、妙なことをうかがいますが――」
「なんです？」
「この広島市の焼跡には、まだ原爆の放射能というやつが、のこっている、とききましたが、本当ですか？」
「あるいは、そうかも知れません。尤も、私は、被爆直後から、住んでいますが、べつに、なんともありません。そのうち、白血球がすくなくなるかも知れないが……」
「しかし、海は、大丈夫でしょうか。海水はかわるから、放射能はないでしょうな？」
「そうですね」
「わしは、いま、戦友の遺骨を、埋葬することを考えていたのですが、せっかく、あれほど帰りたい、帰りたい、と云っていた故郷へ、帰って来たのに、放射能がうようよしている土の中に、埋葬されるのは、やりきれんでしょうから、いっそ、海へ、遺骨を流してやろうか、と思うのです。……瀬戸内海の話ばかりしていましたからな。海の好きな男じゃったのです。もういっぺん、黒鯛（チヌ）とさよりが食いたい、と云うとりました」
「遺族が居らぬのなら、それも、いいでしょう」
「母親がいたのですが、どうやら、わしがたずねまわったところじゃ、ピカドンで、亡くなられたようです」
「じゃ、海へ流しておあげなさい」
「そうします」

野呂内大太郎は、足もとの風呂敷包みを持ちあげると、
「横山、お前は、黒鯛やさよりの泳いでいるところで、ねむるか。放射能のちらばっている土の下よりは、なんぼか、寝心地がええじゃろう」
と、云いかけた。
「私が、舟をたのんであげましょう」
深津三郎が、申し出た。
野呂内大太郎は、この深津三郎が、どの程度の小説家か、知らなかったが、戦後復活した雑誌ジャーナリズムは、深津三郎の作品を掲載することに、躍起になっていた。
深津三郎は、流行作家にされるのをきらって、わざと、東京へ出ないで、この広島に住んでいるのであった。深津三郎は、いまだ独身であった。
したがって、広島では、深津三郎という存在は、代議士や知事よりも尊敬すべきものであった。
港へ出て行くと、すぐに、あちらこちらから、深津三郎に、挨拶があった。
深津三郎は、三日に一度、釣に出る模様であった。
すぐ、舟が用意され、深津三郎と野呂内大太郎は、乗り込むことができた。
「今日は、釣じゃないんだ。兵隊さんの遺骨を、海に埋葬するんだから、そういう場所がいいな」
深津三郎は、船頭に云った。
「海へ葬られるとは、変っとりんさるな」

「海が好きだった人なのだ。なるべく、魚が、たくさん泳いでいるところがいい」
深津三郎は、そうたのんでおいてから、野呂内大太郎に、シベリアのどこにいたのか、と訊ねた。
「イルクーツクというところに居りました。……わしは、そこで、二十八貫が十三貫に減りました」
「苦労しましたね」
「ただもう食うことだけが、愉しみでした。人間はイザとなると、食欲だけじゃ、ということを、知りましたな。食うためには、智恵をしぼりましたですな。……炊事班にまわしてもらえば、腹一杯食えるという考えで、中隊のうち三分の一が、板前じゃったとかコックじゃったとか、料理屋を経営していたとか、肉屋じゃったとか、前歴を、食いものに関係ある職業を書きました」
「貴方は、なんと書いたので？」
「わしは、一計を案じましてな、クリーニング屋と書きました。……ロシヤでも、戦争直後ともなると、石鹸がひどく不足して居りました。将校の衣服を洗う係にまわれば、石鹸の配給があります。なにしろ、将校は、男ばかりじゃのうて、女子も居りますからな。クリーニングは、忙しいです。……わしは、その配給の石鹸を、ごまかして、パンと交換することにしました。……つまり、石鹸を溶きなおして、中へ石炭殻を入れて、一個分を、三個にも四個にもつくりなおしましてな。これを交換するわけです」
「成程――」

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com